

## 第1分科会

### 【主 題】 特別な配慮を必要とする幼児の理解と教育・保育 ～つながる・つなげる支援の取り組み～

指導助言者	井口 妙子
司会者	小林 研志
発表者	吉田 千春
記録者	進木 結衣

#### 1. 発表の概要

##### (1) 主題設定の理由

“気持ちが高まりやすい”“独自のルールや納得の仕方がある”など、近年、特別な配慮や支援を必要とする園児が増え、行政や医療、関係機関と情報共有を図ったことのある園児の割合が年々高くなってきている。また、“育てにくさ”を感じている家庭も多く、保護者支援の必要性も高まっている。また保育する側も園だけで対応していくには困難な現状がある。特別な配慮を必要とする園児の理解を深め適切な支援を考え、改めて“関係機関がつながる”“支援をつなげる”にはどうしたらよいかを検討しながら実践研究を進めていくことにした。

##### (2) 取り組みの概要について

特別な配慮を必要とする園児が“安心した生活を送るために必要なことは何か”と考えた時に、大人のこども理解は必要不可欠である。保護者の中には早い段階で専門機関へのつながりを希望する家庭もあれば、逆に、子どもの姿を受け入れるまでにかかりの時間がかかったり、卒園まで受け入れられなかったりするケースもある。“特別な配慮を必要とする園児”が増えている現状のなか、本園では園児の特性を理解し適切な支援を行うために、医療や専門機関とつながり連携を図りながら“特性の理解”や“特性に応じた個別の関わり方”などについて、その都度アドバイスをもらいながら、日々実践を行っている。様々な事例を通して、「気になる子どもとつながる」「保護者とつながる」、園内の支援体制で「職員がつながる」「関係機関とつながる」、「就学先へつなげる」など、“つながる”“つなげる”をキーワードに、当園が実践している内容を紹介し、特別な配慮を必要とする幼児の理解と教育・保育の在り方を考えていく。



##### (3) 実践事例

次の2事例を通して、本園が行ってきた「気になる子どもとつながる」、「保護者とつながる」、「園内の支援体制で職員がつながる」「関係機関とつながる」、「就学先へつなげる」実践の紹介を行った。

##### 【実践事例1】

- ・ Aさんのコミュニケーションは、「No」「Go」など簡単な英単語がほとんどで、食事は限られた食品の一部しか食べられない。また、Aさんの行きたい部屋や場所に全力で向い、一方的な行動が多かった。加配保育教諭の指示内容を聞き入れることが困難

であった。知らせたい、共有したい情報や約束などは、写真、イラストでは本児にはなかなか伝わらない。そこで動画（本児だけのユーチューブの開設）を作成し視聴させた。本児が興味を持ち内容を理解することが出来た。動画を活用して、“戸外遊びが終わったら、片付けて手洗いをすること”や“落ちたものを食べないこと”、“危険な場所では遊ばないこと”などを知らせた。本児も、動画の模倣をして時間になれば戸外遊びを終える姿が見られるなど、一定の効果が見られるようになった。

- ・運動会では、年長組は開催セレモニーを行っている。年長組になる本児の参加方法に悩んだ。保護者は「他の子と比べて、『できないA』を受けとめることが辛い」と、これまで運動会は参加されずにいた。そこで得意な動きを動画にして、“ゲームをしましょう”と紹介をし、本児を誘ったところ、「We are」と反応し、セレモニーの中に1人だけでその動きをする場面を取り入れることで、運動会に初めて参加できた。
- ・就学先に悩まれていた保護者だったが、保護者の思いを受け止めながら、医師の診察、発達検査、助言などを受けて、Aさんのまわりの関係機関がそれぞれ手を繋ぐことで保護者も納得して就学先を選択され、就学支援委員会を通して最終決定することが出来た。
- ・卒園式では、集団の中にいることが苦手な本児のために卒園式の時間をずらし、保護者と園児、関係職員とで個別の卒園式を行った。また就学先の入学式を見越して、入学式の動きを動画にして保護者に渡し入学式の準備をしてもらった。

## 【実践事例2】

- ・Bさんは、2歳児のときに気持ちが高まると突然“ルンバ”に変身し、友達を押し倒し、友達の上に乗って、両手をぐるぐると回し、吸い込むような動きをしていた。そして、一度変身するとなかなか“ルンバ”をやめることが難しかった。
- ・支援グッズとして倉吉市から助言をもらいながらルンバセットを作成し、本人の気持ちが高ぶった時にルンバタイムでなりきり遊びをさせた。保育室とは違う部屋で時間を区切って個別に思い切りなりきらせて遊ばせることによって、保育時間にルンバに変身することはなくなった。
- ・今興味を持っていることに“〇〇タイムをしよう”と保育教諭が提案するのではなく、「〇〇に変身しているの！！」と、Bさんが“なりきっている世界”をまず保育教諭が受け止め、Bさんと一緒に 空想の世界を十分に味わい楽しんだ後、集団に戻るようになった。
- ・成長とともに興味関心が広がり、離室や、気持ちの高まりが抑えきれない回数が増えたため、気持ちが高まる前に、クールダウンできるよう個別のスペースを設け、大好きな虫が机の前にはってある『研究ラボ』として個別のスペースを作り、Bさんにとって過ごしやすい環境を整えた。

## (4) 成果と今後の課題

### 【成果】

- ・人と人がつながることが、“つながる・つなげる支援”の大きな一歩だと考えている。つながる相手は、園児・家庭・関係機関・職員同士とあるが、成果としては保育教諭が園児の特性を理解し、“つながる”ことで、園児は安心して園生活を過ごす事が出来るようになった。保護者と園が“つながる”ことで、家庭からも同じ関わりを持つことができるなど、何かあれば安心して園に相談できる信頼関係を築くことができた。倉吉市や医療と園とが“つながる”ことで、園が『子どもの特性』に困った時、す

ぐに相談させてもらえる関係性ができている。就学先と園とが“つながる”ことで園児への支援が途切れることなく移行できるようになった。職員同士が“つながる”ことで、園全体で園児への関わり方が共通理解できるようになった。

- ・就学という次のステージでも、安心して過ごす事が出来るように、園での支援や保護者の思いを各機関へとつなげている現状こそが、大きな成果の一つだと考えている。
- ・園内の支援体制についても、“さらなる職員の資質向上”と“特別支援の理解を深める”ため、特別支援コーディネーターの副園長だけではなく、担任を持つ職員が中心となり、今年度は、“特別支援教育にかかわる保育教諭等の資質の向上”を研究主題のひとつとし、日々取り組んでいる。

#### 【今後の課題】

- ・つながった保護者でも就学を前にすると、保護者が過ごしてほしい学級と、園が就学先として適当とする場所とで“すれ違い”が生じることがある。子どもを真ん中に、その子にとって一番良い環境について、家庭と園とが同じ視点で検討が出来るよう、さらなる保護者支援を深めていきたいと考えている。
- ・本園では、長年培ってきた経験をもとに、“関係機関との連携方法”や、“保護者とのつながりをどのように育むか”など、副園長を中心として、園内の支援体制がある。しかし、園内体制を維持し続けるためにも、どの職員でもそのノウハウを理解し取り組むことができる人材育成や、変容しつつある園児の実態に対して時代に応じた支援の質を高める必要があると感じている。

## 2. 研究討議

### (1) 発表内容に対する質疑応答

Q1.事例1のAさんの入園時期や月齢、また自分の意志を表すのに英語を使うのは親にルーツがあるからか。

A1. A児は3歳3か月、年少児クラス(4月)より本園に入園した。両親とも日本人であり、英語を使う外国の方が家族におられるわけではない。動画を多く見る中で、簡単な英単語を使って自分の気持ちを表現することに繋がったのではないか。

Q2.配慮が必要な子が多くなってきているということはわかるが、全園児の30%が、支援が必要であり、また何らかの形で関係機関とつながっているという発表だった。その率がとても高いのはどうしてか。

A2. 1歳児健診、3歳児健診でリストに上がる子どもの割合が高い。また、きょうだいで支援が必要なお子さんもいるし、転園してくる園児もいる。子育てについて相談も増えているし、また健診でリストに上がってきた気になるお子さんを積極的に関係機関につなげようとしている結果なのかもしれない。

今まで発達障がいの子どもは一定数いたと思われるが、気づかなかつた子どもを園や保護者等が気づくようになったから報告される数は多くなってきたと考えられる。発達障がいの子どもが生まれてくる率が高くなってきているのかは、根拠がないのではっきりわからない。

Q3.支援を必要とする子どもに職員が目をつけることが多く、その他の周りの子ども



が「その子だけ特別でいいな」と思う子どももいる。個別の支援をする中でそのような子ども達の姿はなかったのか。また、支援グッズは誰がいつ作っているのか。

A3. 主幹教諭が中心となり副園長と支援グッズの作成を行っている。主幹教諭、副園長には担当クラスがない級外職員なので、勤務時間内で空いている時間を使って作成している。

“〇〇タイム”など個別の支援を行うのは、みんなのいる教室ではなく別室で行うようにしている。教室の中に個別のスペースを作る際も、この場所はどういう場所かを説明しているので、うらやましがったり、自分も同じようにしてほしがったりする園児の姿はなかった。

## (2) 全体（グループ）討議



各園の特別支援に関して、自分たちの困っていることや課題点を出し合いながら3つの内容、本人（子ども）のこと、親のこと、関係機関との連携のことの柱に分け、どこに該当するのか分類しながら情報共有を行う。また、それらの解決策について、グループ内で協議し、検討する活動を行った。

### 【グループ協議の報告】

- ・本人への関わりでは、手が出てしまう子、突発的な行動が多い子など、その対応に困っているという意見が多かった。その際、静かな場所へ行き1対1で話をするなどの対応をすることが多い。一人担任だとその時間が長くなると他の子の保育ができないことに困っている。
- ・家庭との関わりでは、親が自分の子どもは特別な支援が必要であることを受け入れられない家庭が多く、保護者対応に苦慮している。
- ・集団の中に入れたい園児が多くいる。一人担任の学級が多いなかで、担任一人に大きな負担がかかっているのが現実である。子どもが心を開くフリーの先生、加配の先生がいる体制づくりが大きな課題である。
- ・園での子どもの様子を伝えても話が伝わらない保護者がいるが、あきらめないで子どもが困っていることを伝えてアプローチを続けることが大事である。
- ・実践発表を聞いて、管理職が配慮の必要な子どもに気づき、一人担任の困り感に対して、みんなで対策を考える組織でありたいと思う。
- ・保護者には子どものできない事を伝えるのではなく、支援によりできるようになったと伝える方が、理解が進むのではないかと。
- ・診断名がついている園児も、グレーゾーンの園児もいる。気になる園児と出会った時、これから成長してくにつれて見えてくる姿が、発達障がいからくるものなのか、家庭環境からくるもののかなど見極める力を保育士は身に付けなければならない。

### 3. 指導助言

#### (1) 気になる子≡発達障がいが増えているのか

- ・文部科学省調査：通常の学級に在籍する小中学生で学習や行動に困難のある児童・生徒について2002年（平成14年）は6.3%だったのが、2022年（令和4年）では8.8%に増加している。
- ・報告される「数としては」増えている。その背景として考えられることは、
  - ①「発達障がい」ということばが広く知られるようになったこと
  - ②発達障がい、特に自閉スペクトラム症の診断基準が変わったこと  
（※以前は診断に至らなかった児も、「環境」によって支援対象となる）生物学的に増えているのかは今後の研究課題である。

#### (2) つながる・つなげるために、私たちにできること

##### ①本人とつながるために大切なこと

- ・本人の好きなこと・苦手なことを知る。
- ・本人に伝わりやすい伝え方を探る。
- ・計画・実行・評価のサイクルで関わる。

##### ②家族とつながるために

- ・本人の好きなこと・苦手なことをどうすれば本人とうまく関わるができるかを伝える。

##### ③次のステージとつながる（つなげる）ために

- ・本人の好きなこと・苦手なこと、どうすれば本人とうまく関わるができるかを伝える。
- ・家族のサポートが必要な場合もある。



#### (3) 支援の階層モデル

限られた人材の中で誰にどのような支援をしていくのか考えないといけない。

第1層：全ての子にとってよりよい保育・教育（80-90%）

第2層：少人数で関わる必要がある（10-15%）

第3層：個別指導が必要（1-5%）

まずは、第1層にいる多数の園児の保育・教育が重要である。・・・基礎的環境整備(第1層の支援)と合理的配慮(第2, 3層の支援)

#### (4) 家族支援の際に配慮したい保護者への対応

##### ①保護者心理には2つの側面がある。

\*問題を抱えた時の共通の心理（普遍性）として5つの段階がある。

- 1) 不安期
- 2) ショック期
- 3) 否認期
- 4) 混乱期（怒り、取引、抑うつ、罪悪感）
- 5) 受容期

\*発達障がいという特殊性を持つ側面として、問題が何時まで続くか、どの程度対応可能かなどの心理が働く。

大切なのは、今保護者がどの段階なのかを見極め、まずは寄り添うこと。

##### ②どのように対応するか戦略を立てる。

- 1) その「気になること」を自分はどうしたいと思っているのかを書き出してみる。

例：子どもが座って話を聞くようになるようにしたい。

- 2) それをすることで予想される良い点と悪い点を書き出してみる。

例 良い点：専門機関への道が開ける。

悪い点：保護者が怒って嫌われる。

3) 伝えることに決めたら、どんな経路で伝えるかを考えてみる。

例：直接、園から伝えるなら誰が保護者に伝えるのか →慎重に

4) 誤解を与えない工夫が必要

子どもに問題があると保護者を責めているのではなく、一緒に子どもを支援したいということをはっきり伝えること

5) ベストを尽くしても保護者に分かってもらえないこともあることを覚悟する。